府中町ふるさと歴史散歩〔第20回〕

文化財としての考古学の資料 ⑥ 弥生時代の資料

弥生時代の時代背景を簡単に説明すると、紀元前3世紀から3世紀までにあたる時代を指すといわれ、イネ栽培農耕が始まった頃の際立った貧富の差の無い農民社会が次第に貧富の差を生じ、やがて血縁的な共同体社会が分解して階級社会が発生し、同時にこれまで孤立性の高かったムラとムラが水利権、灌漑用水路や農地開発等で有機的に結合せざるを得なくなり、多くのムラが結集してクニが成立していったという時代である。

府中町にある弥生時代の資料は皆無に等しいため、これらの資料だけで弥生時代がどのような状況であったかを説明し読み取っていくことは全く出来ないと言ってもよい。

そのため、府中町だけでなく県内を含む中国地方の文献、あるいはもっと広げて西日本といった広い地域にわたる文化的様相の流れの中で考えていかなければならない。

紀元前の段階のわが国の様子は、中国の『漢書』に「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国となす」とあって、北九州の地域ではムラが成長して統率者（首長）が現れ、多くのクニができていたことが分かる。そしてその中の有力なクニの首長が楽浪郡（現在の朝鮮半島）の役所に朝貢してきた。次いで『後漢書』に「桓・霊の間、倭国大いに乱れ」とあり、後漢の桓帝と霊帝の治世の間（147～188）に、倭国に大きな混乱があったようである。これは土地争いなど近隣のムラどうしの争いから、それを超えた組織的で大規模な武力抗争が行われていたのが二世紀末の日本の様子である。しかしムラ同士の争いはもっと早い弥生中期から始まったようで、集落の周りに堀をめぐらした環濠集落と呼ばれる防御施設のものや、人骨に石の鏃や青銅の剣・戈（古代中国の武器の一種）の切っ先が突き刺さった状態のものや、頭を切り取られて頭骨のない遺骸が吉野ヶ里遺跡ほか数例発見されており、敵の首級をあげるような血なまぐさく激しい戦いがあった。鳥取県の青谷上寺地遺跡（弥生後期）では、50数体の人骨のうち、女性と子供を含む十数体に金属武器での殺傷痕が見られ、非戦闘員の婦女子が戦闘で殺されたようである。このように弥生時代の中期以降の社会は、階級社会のない平和な社会ではなかったことが考古学資料は証明している。これは小さなムラが支配統合を繰り返されながら、次第に多数のムラとムラを統合する政治的社会が形成されるプロセスを示しているのである。そして『三国志』の「魏書」烏丸鮮卑東夷伝倭人の条（「魏志倭人伝」と略称）に「倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を立てて王とす」とあって、倭国に七、八十年間続いた動乱の収拾のため、クニグニによって一人の女子が共立されたとある。これが邪馬台国女王、卑弥呼である。邪馬台国が九州か畿内にあったかをここで論じるのではなく、府中町にあった弥生の集落（ムラ）は極めて小規模であるため、初めは個々に独立した状態から、ムラ同士の結合やより有力なムラへの統合離反を通して、地域ブロックに発達した有力なクニの末端に組み入れられたに違いない。

有力なクニの支配下に属していることで安全保障が得られたのであった。これは弥生時代の青銅祭器の分布状態からも推定できる。

府中町文化財保護審議会
会長　横田　禎昭

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎286―3272

『三国志』「魏書」烏丸鮮卑東夷伝倭人の条